

ユタの成巫過程

石川 雅 健

キーワード：沖縄、精神文化、シャーマン、ユタ、成巫過程

I. 問題と目的

「ユタ」とは、沖縄本島のみならず周辺離島や宮古地方、八重山地方、かつては琉球王朝の城内にあった鹿児島奄美大島地方に「民間巫者」として、地域によっては「カミンチュ」「ムヌス(リ)」「ウゲンサー」「カンカカリヤー」などと呼ばれ存在し、物知り、生き方や進む道など様々な案内役として個人の吉凶を見、中には霊と話す力を持ち、死者の口寄せ、先祖事、仏壇事などの霊的難に応じ、占い、お祓いを行う「相談役」としての役割を与えられ、「野のカウンセラー」として存在している。

一方、「公的巫者」としての「ノロ(祝女)」は「司」「カミンチュ(神人)」とも呼ばれ、先祖代々受け継がれる世襲制で、御嶽、土地神、拝所、神殿等の神声を聞き、祈り、豊穡、安全を願い、^{かななぎ}巫として神声を伝える「仲介役」「女司祭」の役割を与えられている。

いずれも、生まれながらにして神に仕える宿命を持った「ウマリングア(生まれの子)」として認められ、「サーダカ」「サーダカウマリ(精高生まれ)」と沖縄では言われる。勘が鋭く見えない部分を見抜く力、洞察力があると考えられ、桜井(1988)は、両者とも沖縄民間信仰の底辺を貫流するシャマニズムの根の上に立ち、沖縄の民間信仰を支える車の両輪といえると述べている。

本来、世襲制のノロに対してユタは、神に呼び出され使命を与えられる召命型であり、「カンダーリイ(ターリィー)(神垂れ、神障り)」と呼ばれる原因不明の体調不良(気持ちが落ち着か

ない、眠れない、夢ごごち、意識不明、独り言・唄い・踊る、頭痛、胸の圧迫、動悸、皮膚病、出血、食欲不振など）や巫病、夢の啓示などユタになるための通過体験としての「成巫過程」が存在し、そこにはいろいろな辛い体験や度重なる不幸が賦与されることが多い。また、ユタのなかにはノロの役割を担っている人もいて、池上（1992）は、その境界は希薄になってきており、ノロも血縁による一定の条件はあるもののカミダーリイを経て成巫する場合がほとんどであると指摘している。

大橋英寿（2000）は、社会心理学・精神医学の観点から、カミダーリイは「身体的不定愁訴」「祈祷精神病の錯乱昏迷状態」「人格変換状態」に相当するが、医学用語に翻訳できない沖縄独特の病気像である「文化結合症候群」とし、その治療法として「信仰治療」を「成巫過程」にみとることができるとしている。カミダーリイ現象について、精神科医である高江洲（1983）は、精神医学用語に置き換えるのではなく「カミダーリイ症候群」として把握するのが望ましいとしている。

ここでは、現代社会において、沖縄の神々に呼ばれ不思議な力を得つつ、自らのカミダーリイが収束していったA氏とB氏の生育史を辿ることで、その成巫過程を垣間見る。

II. 事例

1) 事例A 男性、面接時66歳（200X + 10年没）（200X年より数年かけた面会での聞き取りとAさんの著書「カミングワ」を参照）

昭和のはじめA氏の父親は、単身で開拓移民としてフィリピン諸島の南に位置するY島で綿栽培をしていたが、何年かした後、事業に成功し故郷の人々をY島に呼び寄せ、次女と長男は沖縄の祖父母のところに残したものの母親とともに長女が海を渡ることになる。そして母親はその地で、次男に次いで200X-60年に三男としてA氏、その後三女を出産する。A氏は、5、6歳頃までY島で過ごす。物心つく頃は戦争末期であり、戦火に追われ山中を歩き回る生活であった。家族・親類ともども山中で捕虜になるものの、父親と叔父は日本兵に連行され、「逃げ帰った叔父が『(父親は)日本兵に撃たれ亡くなった』と皆に言っていた」と後に姉から聞くことになる。収容所に集められた日本人は、日本に送られることになるが、沖縄の地を踏む前の九州で母親が栄養失調で亡くなってしまふ。そのため、A氏の兄弟4人は本州南部の孤児院に入れられ、1年程経ちA氏が数え7歳頃、沖縄から面会に来てくれたおじさんとともに沖縄に帰ることができた。しかし、沖縄に残っていた祖父母と長男は亡くなり、次女のみ生き残っていた。帰ってきて住む家もないことから、一時期親戚に預けられたが、その後、沖縄南部に嫁いだ次女と一緒に小学校3年生まで暮らすことになる。

孤児院から沖縄に帰ってきた頃（7歳位）から、いつも山の中の大きな木の下に居ると、農道みたいな山すその道から「お〜い、お〜い」という、とても透き通った女の人の声が聞こえ始める。初めは夢の中で始まったかもしれないが、そのうち起きているときにも聞こえ始め、木陰に入ると必ず聞こえてきたという。

小学校3年生（10歳頃）の夏休み、生活苦ということだけでなくいじめや乱暴を繰り返し、他人の物を持ってきてしまうことが頻繁にあり、他人に迷惑をかけるということで、海人（うみんちゅ：漁夫）として売られ、沖縄本島よりさらに南の島で働かされることになる。売られてきた子どもはパンツもはかないマルバイ（丸裸）の生活で、サバニという小型漁船を少し大きくしたものに12、3人が乗って1週間から1ヶ月以上南の島々や外国にも出向き、魚獲りや海草・貝獲りなどの海の仕事を18歳位まで行う。

以前から仕事も苦しく寒さとひもじさもあったために15、6歳くらいから早く沖縄に帰りたいと願っていたが、18歳になったばかりの冬、チャンスが訪れた。沖縄本島から親戚が来ていた時にその人の船に夜中もぐり込み、ズボン1本だけの姿で南の島から密航し、途中で見つかるものの知り合いの人にかばってもらい3日位かかって沖縄へ。

その後、親戚の手伝いをした後、車の免許が取りたいためN市の運送会社に住み込みで働くことになる。仕事で車に便乗して運転も習い運転免許の試験を受けるのだが、何度受けても学科が分からなくて落ちてしまう。結局、字が読めなくて試験に落ちてしまうため、近所のお姉さんに3ヶ月程免許を取るための字を覚えてもらい、運転免許試験に合格する。

免許を取って仕事を続けながらも、以前の「お〜い」という呼ぶ声は聞こえたが、さらにお酒も飲まないのに顔が真っ赤になったり座っているだけで体が揺れて酔っ払ったりする現象が起き始める。沖縄本島にいると飲んでないのに酔っばらう現象が起きるので、南の島で運転手をして3年ほど生活する。

21歳の時、長女の姉から「本島に帰ってこい。拝みすべきものがいっぱいあるみたいだから」「ユタに行っても自分の家のことは何も出ない（言われない）のに、行く所行く所みんなあなたのことが出る（言われる）。『生まれまぎさし（生まれが大きい者。霊力を持ち何かの役目を持って生まれきたと言う意味）がいるから、これのことをやっているから（生まれが大きい者にはちゃんと霊能力を使えるようになるまで開眼させてから）拝みなんかはこれにやってもらいなさい』としか言われないから、帰ってこい」と心配して手紙が来たため、沖縄本島に帰った。姉から拝みごとをしないとイケないと言われ、ユタに会いに行くと「神人（かみんちゅ：神に仕える者）の道開けなさいよー」と言われる。しかし、生活に追われ逃げていたら大きな事故に遭う。トラックに正面衝突され車の前部も運転台も押し潰されたが、大した外傷もなくお金の心配もあったため病院にも行かなかったが一度寝込んだら動けず、1週間ほど自室で水のみで過ごす。この事

故の後から、「お〜い」と言う声の他にわいわいと大勢の声が聞こえるようになる。

A氏は、周りからも「ユタの家に行け」と言われ、ユタからは「靈感が強い生まれのようだ」「神の子（かみんぐわ）よ、自分の道は自分で開けなさい」と言われる。とは言われても、どうしたらよいのか意味が分からず、悩んだという。

22歳で結婚。次男が生まれた後の26、7歳位の時、突然喉が腫れ、食事でも唾も喉を通らないため、大阪の病院に入院。しかし、2、3日すると痛みもなくなり1週間ほどすると「あなたはもう何でもないので帰ちなさい」と言われ、それからというもの自分からあちこち徘徊回るようになり、ユタの家にも通い続けた。

A氏の故郷のユタたちは、「お前は根神（にーがん）アジシ（約400年前に神の子として祖先に見立てられ村の神事を司っていた女の人を祀っている拝所）の見立ていん子（ぐわ）（見たて子）」と言われ、門中（むんちゅう：父系制の血縁意識を持つ親族集合体）のお年寄りの神人たちからも「ここには昔、神人だった女の人がいる。お前も同じように見立てられているんじゃないか。ここを拝みなさい」と言われる。それでようやく、子どもの頃からA氏を「お〜い」と呼んでいるのはここに眠っている女の人に違いないと悟ったという。しかし、自分は何をやらないといけないのか自問しつつもどうするべきか分からなく何年か過ぎることになる。

36歳の時、仕事で高压線に触れ、右手が一時麻痺して動かなくなる事故に遭い、さらに1年後の晩夏、鉄板を切断・プレス加工する機械から鉄の切れ端が飛んできて、A氏の右目の下に当たり骨をぐしゃぐしゃに砕く事故に遭う。救急車でN病院に運ばれるまでの記憶はあるものの、その後は意識不明で、R大学付属病院に移されるも、病室の空き状況と担当医師の関係で、骨は複雑骨折・右目は完全にひっくり返って白目の状態のまま18日ほど廊下に寝かされていたという。その時、子どもの頃からずっと呼びかけている女の人の声で「お前を殺すことはしない。お前は死なない。だからちゃんとやるべきことを分かりなさい」「お前の祖先のアジシ（古い門中墓）を探しなさい」と言われ、さらにちゃんとした方言で初めて「根神アジシ、またや七腹イリクやくとう、根神アジシや くまなかいるめんしえーくとう、くまとうめーてい行きよ（側に根神の神様がいらっしゃるから、その人を捜し当てなさいよ）」と話しかけられる。

約13ヶ月の入院後、片目は完全に真白になっていたけれど、何をやればよいのか教えられ、それをすることで眼も絶対治ると信じるようになっていた。そして、事故に合った約3年後の春、退院して最初に「ニーガン御墓」の碑文が建っている拝所へ行き、そこに祀られている女の人に教えを請うと、夢の中でこの女の人の声で「『根神アジシ』、またの名を『七腹イリク』（我那覇・名嘉地に初めて集落を造った数人の創設者が眠る墓の意と女の人の声で教えられた）」という墓を探し出して、そこに眠る祖先たちから直接お手本をもらって道を開きなさい」と教えられる。

それからというもの、仕事そっちのけでつるはしとスコップを持って門中の本家から寅と卯

の境目の方角を掘って歩くことになる。途中、空き墓や御嶽（ウタキ）さえも壊して進んでいったという。周りの人たちはそんなA氏を「倒れ者（たーりむん）とか神倒れ（かみだーり）している」とされ、霊力は強いが、その力を使いこなせず精神状態がおかしくなってしまったと思われるが、一方で「あれが来たらゆーしよー（A氏が来たらよくしてあげなさいよ）」とか「正気になって頑張らないといけないよ。落ち着きなさい」と励まし注意をする人もいた。その頃から、声だけでなく夢の中でその女の人の姿を見るようになる。三十代半ば位で薄いねずみ色の着物を着ており、顔は卵型で色白く、長い真っ直ぐな髪を背中の方になでつけていた。さらに、馬に乗って本家の東側に向かって空を駆けていく男の人の姿も夢に現れるようになる。その人は、七十歳くらいで髪の毛は真っ白で短いあごひげを生やし、古代人のように布一枚で身体を被い、片肌を脱ぎ、肩を一方だけ出している。顔は原始人のように色黒でごつく、2メートル近いと思われる長身と大きな体格を持っていた。

毎日毎日山を掘り返したこの頃、女の人から夢の中や探している途中に「苦しいと思うな」「今あきらめたら、お前の過去の苦労はなんだったのか。頑張りなさい」と何度も励まされる。

途方にくれていた200X-40年の旧正月の前、夜9時ごろ、「場所、我（わー）が習（し）すくとう、鍬篋（くゑーひら）持ち、立て一わ（場所は私が教えるから、クワやヘラを持って立ちなさい）」と女の人声が聞こえ、片方の目で車を運転し気がついたら崖の上。懐中電灯とスコップを持ったまま、2、3メートル滑り落ち、止まった崖の斜面でじっとしていると、女の人「やーが居ちよーる根（にー）ぐい起（う）くせー。くまなかいめんしゑーくとう（お前が座っている草の間の根を掘り起こせ。ここにいらっしゃるから）」との声。根っこにスコップを力いっぱい突き刺し穴が開いた瞬間、ブワッと青白い火が飛び出し、「ああ、人魂っていうのはこんなかんじなのかなあ」と思ったと言う。開いた穴の中には、厨子甕（骨壺）がいっぱい並んでおり、その前でA氏は「自分を導いてくれてありがとう」と御礼をした。

そのお墓を探し当ててから、体調が変わり始め、見えないはずの右目に光を感じはじめ、さらに2、3ヶ月の間に急速に右目が回復する。検査をした医師は「事故後3年間も見えなかったのに、不思議なこともあるものだ」と驚いたという。

さらにその頃、突然、男の人の声で「慌ていなよー、我（わん）が言いし、真肝（まじむ）から聞きよー（あわてるなよー。自分の言うことを素直に聞きなさいよ）」と聞こえ、その後、神様と仏様との違いや土地の神様にお礼をすること、家の造り方についても「精神的におかしくなっている者は全て家の神様や屋敷の神様方に御無礼があるから、人は精神的に倒れてしまうのだ。難病というものも、全て土地屋敷の使い方、または家の造り方によってそれぞれ異なる症状が現れるものだ」など何度も何度も教えられることになる。A氏は、小学校もちゃんと出ていなかったため、男の人の声での言葉や夢の中の文字を何回も何回も見せられるが理解できず

悩んでいると、女の人の声が聞こえてきてA氏の行動をリードしてくれて、ようやく覚えたという。

200X-23年、家と人間の関係について夢の中で「家は人間の身体を想定した造りをしなさい」と昔の家である赤瓦の家を見せられながら詳しく教えられる。家の北西の方角に竈があって、便所はさらに下がって外にある。さらに、太陽の光が入る東や南を向いて床の間があり、中の間があり、北西の方角に水回りがある。そうした昔の家の造り方は正しかったと教えられた。そして、「床の間は頭、お腹は中の間、お尻はトイレや台所などの水回り」というように、家はちょうど人がひざを抱えて横になっているような構造にしないといけない。換言すれば、頭はいつも明かりのさす方向（東か南）、そしたらお尻は必ず北西の位置になると教えられる。家は人間にとって母体であり、そこに住む人間は胎児。母親の身体に異常があるなら、そこに宿る人間が正常に育つわけがないということである。

そう教えられ、知ったからには自分の住む家も直さないといけないと思いつつ、改築にはお金がかかると躊躇していた矢先、A氏の長男が奇病に罹り、医師から「助かっても身体麻痺が残る可能性が高い」と言われ2回の大手術を受けることになる。その後、A氏は火の神（ひぬかん：台所に祀る竈の神様）を通して家の神様に詫言を入れ、トイレと風呂場、台所を家の真ん中から北西側に移動する工事を敢行する。すると一時期両眼の右視野が戻らないと宣告された長男は大手術したにもかかわらず2ヶ月後に退院。退院後1ヶ月後に仕事に復帰し、さらに1ヶ月後には車の運転ができるくらいに回復した。

そしてA氏は、年号が平成に変わり暫くして、男の人から教わった正しい家の造り方通りに家を新築する。200X + 10年、「次の仕事があるから」と言い残し、永眠。

2) 事例B 女性、面接時46歳

3歳のある時Z島内（本島知念半島の東約5kmに位置し、琉球の国造りにちなんだ神話や神の国として知られている）の路上（ハンチャタイ：B氏は「あの世とこの世の半分半分のところ」と説明）でミルクムナリ（弥勒菩薩）に出会う。面接時当時を振り返って、お面を被っているので中が見えなくて「怖い」と感じたという。

以後、幼少期から、風邪や足が痛くなったりもどしたりしたが、病院に行くと「何でもない」と言われた。中学までは体調不良が続いたため、以後島内に住む本家の人（ティーン（天）ユタ：一族を守るユタ）にお祈りをしてもらっている。何かが見えるというより、身体に受ける感じがする。

高校へ進学のため島を出てS町（沖縄本島南部）で生活を始める。その時位から霊を見るようになる。また、ものが落ちてくるといったポルターガイスト現象も起き始めたため、母親

が沖縄本島のユタのところへ行ってみてもらおうと、現象を抑えるために「封印をする」か「神の手伝いをする子となる」か、どちらか選択するように迫られ、母親としてはお祈りをして「封印」することに。しかし、その後も普通の生活を送るもののダラーとしてしまう。高校卒業後県内で就職するが、亡くなった人が見えるなど霊的なものを見たり感じたりし続けた。

29歳で結婚。子どもが生まれて（30歳）から、人が言っていることと感じていること（神様の言ってること）の違いやズレが分かってしまう。特にご主人の叔母さんがユタで、祈りと思っ

ていることが違うということが分かってしまった。Bさん自身だけでなく2人の子どもも寝たり起きたり状態で調子が悪く、「神様は居るのかなあ」と感じ始めた。そのうち眼を開いた状態で眠れない状況が続いたため自ら精神病院へ行き、寝られるようにと投薬を受けるが、余計に眼がはっきりとして眠れず、他の病院にも通院してみるが改善されず、「薬じゃない」と感じた。

そんな折、2人の子どもたち（下の子がまだよちよち歩きで、上の子も幼児）が「Z島へ帰ろう」と言い、島に戻った途端爆睡し1日中寝てしまう。Z島に来てからは、喘息もあり週1日保育園にも行けるかどうかだった子どもたちも元気になる。

1年位かけて住む家の中をペンキで塗り、床を磨き綺麗にし、その頃から『感じる』ことができるようになっていた長女が「大丈夫」というところに住み始める。島では、海に潜って生物を見て「人間って小さいなあ」「生るこの意味、生きていくこと」を考え、しばらくの間、貝を売って生活した。

その後、「私は神世のことをしなくてはいけないので」と夫のことを考え、離婚を決意しZ島に戻り、1年後の春に離婚（33歳）。その直後、大量吐血。自ら冷静に対処し、本島の病院へ行くが詳しく調べる必要があると言われて国立病院にて再検査を実施するが原因不明。入院中も何度もユタさんのところへ健康祈願をしてもらいに行く。その間も全身に電気が走りビリビリする。そうした中、こうした症状は単なる病気ではなく、神からの知らせであり、だからこそ役に立っていこうと心する。のちにこの時のことを自己治癒力で治ってきた感じと語る。

そしてZ島の実家に帰る途中、3歳の時にミルクムナリを見、出会った同じ場所（前述のハンチャタイ）で、「ウティン ウティン カナマルヨ（天よ 天よ カナマルヨ）（金丸：第二尚氏王統初代国王 尚圓王の即位以前の名前、長女は聞得大君加那志（初代聞得大君：琉球神道における最高神女（ノロ））」という声が聞こえた（33歳）。

その後、那覇のユタのところに足を運び、声がどういう意味なのか尋ねに行くと、「祈りをやらないといけない」言われた。さらに「貴女にはノロのセジがある」とも言われたが、「それは違う」「やりたくない」と反発を感じつつも一週間に4、5回そのユタに通い続け一ヶ月で20万円支払った。そのうち、お金を支払う一方で、困っている人の話しを聞き、お祈りす

ることでお金を貰うのはどうしてなのかと思い始めた。天照大神が祭られているX島（沖縄本島北西部に位置。第二王統の発祥の島）へお祈りに行った時、降り立った港で見た半分切れ掛かった虹に向って、「誠の神の子に逢わせて下さい」と願った。

疑問を持ち始めながらもお祈りの手伝いをしていたある日突然、眼が真っ白になる（34歳）。祈りが通っていれば、眼が白くならないはずなので納得がいかない。そんな時、Z島に来ていた別のユタの人と出会い「貴女は（ユタを）やるものではない」「沖縄の神様を集めてどうするの」と言われて、「沖縄の神様を集めるのではなくて、心に降りてくる神だけを残して、親子3人健康で居られれば良い」と思い、その後自分のためのお祈りを始めるがその後も寝たきりの生活が暫く続く（35歳まで）。

X島に行ってから約1年後（35歳）、友人が「玉城のミントウン（ミントウグスクがあり、漢字では「明東城」と書くらしい。琉球人の先祖とされているアマミキヨ（アマンチュウ）が、安住の地としたのがミントウグスクであると伝承されている。このグスクの広場の東側には、Z島遥拝所がある）という場所で出会った人に電話してみたらよいのでは」ということで、その方に電話をすると「セジを持っているので、かつて自分が見た聞いた場所へ信じて行ってください」と言われる。そこで「大日如来」様にお祈りして、「どうしたらよいのか」と尋ねると「貴女のチジ（自分の神様）ですよ」と何度も同じことをおっしゃるので、そこで3歳のときに見えたり聞こえたりしていた場所に足を運んだ。すると、3歳のときに見た同じ神様を感じられた。その神様に導かれ、自分に磨きをかけるようになる。

神様は、自分の家に祭るものだから、そして家を持つこと、土地を借り、家を建てて「民宿」を経営して徐々に自ら生計を立て自立することになる。

最後にBさんは「人に頼り人の判断で生きるのではなく、自分自身が心で受け止めることが大切」「人との出会いがあり、その方のお手伝いをするのが結局は自分のため。自分に戻ってくる」と言葉を結んだ。

III. 成巫過程について

ユタの成巫過程について大橋（1988）は以下のように示している。（図1）

事例を取り上げる際、個人それぞれの成巫過程は異なり、時間の経過とともにその人の発達の変容や人生選択の有り様を視覚化する必要がある。そのためには、人間の成長を時間的変化と文化社会的文脈との関係の中で捉え記述する方法論的枠組みで捉え描き出す質的研究法である「複線径路・等至性モデル（TEM: Trajectory Equifinality Model）」を用いた分析が有用と考える。

ル)」と「歴史的構造化サンプリング (HSS: Historically Structured Sampling; ランダムサンプリングではなく歴史的な視点に基づき、対象者や収集データを選定する方法)」と「発生の三層モデル (TLMG: Three Layers Model of Genesis; 分岐するポイントでなにかが起きているその変容のメカニズムを捉えるためのモデル)」の3つのアプローチを総合したものとして「複線径路・等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: TEA)」を提唱している。

今回は紙面の都合もあり、上記のB氏の成巫過程に加えA氏のそれも加味した検討・考察は、別の機会に論ずることとし、今回は大まかな点のみについて記す。

ユタ (カミンチュ) になるという「等至点」に至る成巫過程における「社会的方向付け」と「社会的ガイド」について考えてみると、人生の選択において行動を制限する「社会的方向付け」と個人の行動を後押しすると「社会的ガイド」に関して、前述の大橋が示したモデル図 (図1) とほぼ合致している。つまり、A氏・B氏共に通常の日常や現実を超えた守護神の声や姿を見聞きし、カミの指示に反するあるいは意に沿わないことを切っ掛けとして事故やカミダーリィとしての不調や病気が始まり、正しい道に導く「社会的方向付け」も進むべき行動を支える「社会的ガイド」もカミが関わっている。B氏においてはTEMで示したように、母の願いであったり元夫の理解も「社会的ガイド」に相当する。

何れにせよ、人間を超えた叡智を持つカミの下で、人間とカミとを繋ぎ・結ぶ人間として生かされるユタ (カミンチュ) は、B氏が「人との出会いがあり、その方のお手伝いをするのが結局は自分のため。自分に戻ってくる」と語ったように、現世では縦横永代続いている人と人との関係を大切にすることの重要性を示すもので、こうしたことをB氏は自身の成巫過程を通して自らの人生を介して体験・獲得しているように思われた。

今回は、A氏の成巫過程をTEMで示すことが出来なかったため、詳細に検討することが叶わなかった。この点については、次稿に繋げるものとした。

最後に、お忙しい中、快くインタビューに応じて下さったA氏とB氏、さらに論文掲載に同意して下さいご家族の皆様様に深謝申し上げます。

文献

- (1) 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ (2012) 複線径路・等至性モデルのTEM図の描き方の一例 立命館人間科学研究, 25, 95-107
- (2) Elade, M. (1958) *Birth and Rebirth* Haper & Brothers, New York (堀一郎訳 1998 生と再生 東京大学出版会)
- (3) Elade, M. (1968) *Le Chamanisme* (堀一郎訳 2004 シャーマニズム (上・下) 筑摩書房)

- (4) 比嘉康雄 (2017) 日本人の魂の原郷 沖縄久高島 集英社
- (5) 外間守善 (2016) 沖縄の歴史と文化 中央公論新社
- (6) 池上良正 (1992) 民俗宗教と救い 淡交社
- (7) 石川雅健 (2020) 沖縄の精神文化と超越 人間性心理学研究第37巻2号 日本人間性心理学会
- (8) 石川雅健 (2021) 現代社会におけるシャーマニズム 愛知学院大学 教養部紀要 第68巻第1, 2, 3
合併号
- (9) 伊藤雅之 (2009) 現代社会とスピリチュアリティ 溪水社
- (10) 河合隼雄 (2000) 心理療法とイニシエーション 岩波書店
- (11) 又吉正治 (1993) 琉球文化の精神分析①～③ 月刊沖縄社
- (12) 長嶺伊佐雄・長嶺哲成 (2011) カミングワ 家族を癒す沖縄の正しい家相 ボーダーインク
- (13) NPO 法人久高島振興会 (2013) 久高島猫の巻 表 <http://www.kudakajima.jp/nekonomakiomote.pdf> (閲覧日：
2017年8月10日)
- (14) NPO 法人久高島振興会 (2013) 久高島猫の巻 裏 <http://www.kudakajima.jp/nekonomakiura.pdf> (閲覧日：
2017年8月10日)
- (15) 岡部隆志・斎藤英喜・津田博幸・武田比呂男 (2001) シャーマニズムの文化学 森話社
- (16) 岡本太郎 (2016) 沖縄文化論 中央公論新社
- (17) 沖縄観光コンベンションビューロー編 (2000) 美ら島 沖縄観光コンベンションビューロー
- (18) 大橋英寿 (1998) 沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究 弘文堂
- (19) 大橋英寿 (2000) 沖縄のシャーマンにみる癒し 心身医学40-6 423-428
- (20) 桜井徳太郎 (1988) 桜井徳太郎著作集6 日本シャーマニズムの研究 下 ―構造と機能― 吉川弘文館
- (21) サトウタツヤ (編) (2009) TEM ではじめる質的研究 誠信書房
- (22) 斎藤裕 (2013) 精神科医が『カミングワ』から教わったこと ボーダーインク
- (23) Samara, T (2004) *Shaman's Wisdom* (奥野節子訳 2014 シャーマンの叡智 ナチュラルスピリット)
- (24) 佐々木宏幹 (2001) 聖と呪力の人類学 講談社
- (25) Stepanoff, C・Zarcone, T (2011) *Chamanism* (遠藤ゆかり訳 中沢新一監修 2014 シャーマニズム 創元
社)
- (26) 須藤義人 (2011) 久高オデッセイ 晃洋書房
- (27) 高江洲義英 (1983) 南島からみる精神医学と風土 (現代思想11-11 青土社 1983 66-82)
- (28) 高橋三郎・大野裕監訳 (2014) DSM-5精神疾患の分類と診断の手引き 医学書院
- (29) 谷口貢 (2000) シャーマン (巫者) と成巫過程 (桜井徳太郎編 2000 シャーマニズムとその周辺 第一
書房 65-79)
- (30) 友寄隆静 (1981) なぜユタを信じるか 月間沖縄社
- (31) 湧上元雄・大城秀子 (2010) 沖縄の聖地 ―拝所と御願― むぎ社
- (32) 安田裕子・サトウタツヤ (編) (2012) TEM でわかる人生の径路 ―質的研究の新展開― 誠信書房
- (33) 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (2015) TEA 理論編 新曜社
- (34) 横山彰人 (2001) 「子供をゆがませる間取り」情報センター出版局